

平成 20 年 6 月 30 日

## 草の根技術協力事業 モニタリングシート(平成 20 年度第 1 四半期) ※電子データも提出してください。

PDM (なけれ ば案 件概 要票) から プロ ジエ クト目 標、成 果、活 動と転 記する。	1. 対象国名・事業名	スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発	
	2. 事業実施団体名	特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会	
	3. 事業実施期間	平成 19 年 9 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日	
	プロジェクト目標	コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。	
	成果1	<b>活動実績</b> スリランカは 140 年前までは、コーヒーランドだった事実は、あまり知られていない。そのコーヒーはどうして現在の紅茶に変わったのか、当時コーヒーは一つの輸出産業であった。スリランカでの位置づけ、そして輸出量はどれほどあったか、など調査をした。 当時植えられていたコーヒーの追求、そしてこのパンフレットは、草の根支援事業としてプロジェクト「スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発」の報告書である。(写真添付)	特記事項(計画通りにいかなかつた理由・問題点・注目点)  活動の広がりは、コットマレーのカウンターパートナーの意識と頑張りが注目されるようになったが、次に大切なことは、工場の管理、運営が農民や農村の自らの手で行われることである。 8 月にはコットマレー地域でコーヒー豆が収穫される。どれだけ収穫されるかも注目点の一つだが、その収穫した豆を、工場で乾燥加工するのは、スリランカコーヒーにとって、まさに初めてのことである。工場の稼働、機械、そしてコーヒー豆の出来具合などすべて注目される。
	活動1-1 コットマレースリランカフェアトレードコーヒーの広報用パンフレット作成		
	活動1-2 スリランカのコーヒー栽培の他地域への影響		
	活動1-3 コットマレーコミュニティ工場の建設オープンセレモニー		

## 四半期振り返りコメント(団体)

プロジェクトの目標の一つに、対象地域農民やカウンターパートナーの自立を目指している。その自立の手助け、援助が我々プロジェクトの任務と心得るが、これまででは、どうしても当我们プロジェクト側の進行の中心だったが、自分の地元のお寺の敷地に、工場が建設され、そして乾燥機械が完成し、その姿が彼らに見えてきたところから、彼らに技術の移転などする必要がある。

そこから自立の精神の芽生えを見つけることが出来る。それは、自分の地域でコーヒーの生産をすることで、生活改善につながるという初期のモチベーションから、さらにコーヒーチェリーを加工し販売するというように、次のフェーズのモチベーションの高まりとなる。

その点が、プロジェクトのカウンターパートナーが村地域のリーダーに育ってきているように思うが、さらにこの自立の精神を確かなものにするためには、20年度第2四半期の我々の活動が重要である。コーヒーの赤い完熟実の収穫、集荷、水洗い、脱穀、乾燥、選別など行う工場運営技術が求められる。これから彼らにその技術を指導するのが当プロジェクトの任務である。

工場建設完成に当たり、コーヒー加工、調整が彼らの手で行われるように、これからどのようにアドバイスしていくか、どのように指導していくか、十分考えて、必要な専門スタッフなど検討しなければならないと考えている。ただ、一番の問題は、彼らのモチベーションを高めることが、最大の指導だと思う。

9月にコットマレー農民とカウンターパートナーを招聘して、日本の農業組合の見学やコーヒー工場、日本のコーヒーマーケットを学んでもらう予定にしている。JICA 九州で、9月13日(土)セミナーに農民代表として参加し、コットマレーのコーヒー農園からの報告をする予定だ。そして、彼らに以下の点を学んでもらう。

### 1 消費地のコーヒーについて

世界で3番目の消費地である日本は、コーヒーの飲み方、お店など、彼らにとって、想像できないかもしれないが、これから先、実際にスリランカからコーヒー豆を日本に輸出するようになった時のために、自分たちのコーヒーのマーケットを知る機会にして欲しい。

### 2 コーヒー豆のロースト

生豆がローストされ、コーヒーが飲用される。そのロースト(焙煎)とはどんなものか、コーヒー味とはどんなものか。熊本のコーヒー工場の見学をする。また、日本の技術レベルの高さなど様々なことを学び、そしてスリランカでの農村地域の生活改善向上のモチベーションを高めることにつなげる。

### 3 共同組合組織

大分県農業組合の見学を行う。コットマレーは農業組合のもっと近代的な運営のために、日本の農業組合の組織を農協と言う名前を持っている農業協同組合を見学する。

## 在外コメント

## 国内機関コメント

事業が開始して1年が経過する本年度第2四半期は、プロジェクト目標達成に向けての大きな転換期となる。具体的には、加工工場におけるコーヒー豆の加工技術の移転や、カウンターパート機関関係者3名の日本における研修を通して人材育成が上げられる。コーヒー豆加工の技術指導には、日本から短期間派遣される専門家の他に、現地で継続した指導やモニタリングが可能な存在が必要となる。そのためにも、日本へ招聘される人物が本事業の中心的存在となることが期待される。

